

# 断薬とスピリチュアルな成長：

## 薬物依存からの「回復」調査における日記法の可能性\*

南 保 輔

### 論文要旨

薬物依存からの回復について、NAのベーシックテキストでは、断薬とスピリチュアルな成長が必要とされている。パネル調査インタビュー法を用いて、ある薬物依存者の断薬史を再現することができた。その一方、スピリチュアルな成長誌を調べるには、克明な日記の存在が効果的であった。

NAミーティングが効果的であり、積極的に発言するということがスピリチュアルな成長を示すものであった。発言することに手応えを感じたり、NAの世話人を引き受けたりといった小さなエピソードは、日記においてその日付とともに記録され、出来事の前後関係を再構成する資料をもたらすものとなっていた。

キーワード：薬物依存、回復、日記法、パネル調査インタビュー、ダルク、ナルコティクスアノニマス (NA)

### 1 はじめに

薬物依存者にとって「回復 (recovery)」とは、目標であると同時に希望でもある。薬物依存者のライフ (生活と人生) のすべてが「回復」と結びつけられると言っても過言ではない。だが、具体的に「回復」がどのようなものかを特定しようとする、たちまち困難に直面することになる。

著者たちのダルク研究会は、ダルク (DARC ; Drug Addiction Rehabilitation Center) の人びとを対象とするフィールド調査を行い、薬物依存からの「回復」過程を明らかにしようとしてきた (南 2012 ;

平井 2013a；相良 2013)。ダルクは、「薬物依存当事者たちが最低数か月にわたる長期の共同生活を送る中で、依存からの『回復』をめざす民間リハビリテーション施設」（平井 2013b：3）である。われわれは大都市圏の2つのダルクの利用者（以後、「メンバー」と呼ぶ）とスタッフを対象とするパネル研究デザインを含むインタビュー調査を行い、そのうち14人について「語り」をまとめた（ダルク研究会 2013）。

本論において、そのうちのひとりのBさんの「回復」の歩みを取り上げる。Bさんは、覚せい剤使用などの罪で5年余り服役した後、ダルクとNAにつながって5年以上となる。2節に見るように、「回復」の2つの柱として断薬とスピリチュアルな成長とがあるが、これらをかなりの水準で達成している。

Bさんを取り上げる理由として、Bさんが克明な日記をつけており、その利用が許されたということがある。「回復」は長期にわたるプロセス・現象であり、出来事が生じた時点や前後関係などを正確に特定することには困難がきまとう。一般に、薬物の再使用（「スリップ」と呼ばれることが多い）とクリーン（使用していない状態）は薬物依存者にとって最大の関心であるからだろうか、これらについての情報は、インタビューにおいてかなり正確に引き出すことができた。その一方、スピリチュアルな成長というのは、それが具体的にどのような要素から構成されるかがはっきりしないためか、インタビューでアプローチするのは困難であった。

Bさんの日記は、スピリチュアルな成長を具体的、経験的に探求していくにあたって、貴重な情報源となっている。本論は、インタビュー法を補完する調査資料としての日記の可能性の一端を示すことをめざすものである。

## 2 NAのベーシックテキストにおける「回復」

Bさんの「回復」の歩みを取り上げるまえに、「回復」の二大柱が断薬とスピリチュアルな成長であるという根拠を確認しておこう。薬物依存からの「回復」をめざす人びとの組織としてナルコティクスアノニマス（Narcotics Anonymous、以下組織については「NA」と表記する。日本のメンバーのあいだでは「エヌエー」と呼ばれるのが普通である）

がある。ダルクでは、一日3回ミーティングに出席することになっているが、これらのミーティングはNAの教えをもとに、NAの文献を使って行われている。<sup>1)</sup>

その文献が「ベーシックテキスト」と呼ばれる、『ナルコティクスアノニマス』という書物 (Narcotics Anonymous 2006) である。<sup>2)</sup> この書物の冒頭には、以下のように書かれている。

アディクションとは何かということについて書かれた本は数々あるが、本書は回復だけに焦点を絞っている。もしあなたがアディクトで、この本に巡り合ったのだとしたら、ぜひこのチャンスを生かして読んでいただきたい。

(Narcotics Anonymous 2006 : 1)

薬物依存者は、<sup>3)</sup> ダルクやNAのミーティングでこの本を毎日のように読んでいる。まさにベーシックテキストである。

このベーシックテキストからは「回復」について大きく以下の4つを読み取ることができる。

- ・「回復」は可能である。
- ・「回復」のためにはまず断薬すること。
- ・「回復」にはスピリチュアルな成長が必要である。
- ・「回復」には終わりが無い。

「回復」は可能であるというのは、依存者にとって根本的な動機づけとなるものだ。依存していたときの「絶望的な心と体の状態」から「回復すること」(Narcotics Anonymous 2006 : xvi) ができるとベーシックテキストはまず訴える。

断薬については、「まずは、使わないということからアディクションの回復は始まる」(Narcotics Anonymous 2006 : 11) という一節がある。そして、「次に着手すべき課題」として、「**神**についての概念を発展させていくこと」が必要とされる。<sup>4)</sup>

回復への第一歩は使うのをやめることだ。(略)

自分で理解している**神**についての概念を発展させていくことが、次に着手すべき課題だ。(略) 回復もただ薬を断つだけにはとどまらない。回復とは私たちの考え方や姿勢を積極的に変えていくことだからだ。

(Narcotics Anonymous 2006 : 86 ; 強調は原著)<sup>5)</sup>

「**神**についての概念を発展させ」、「私たちの考え方や姿勢を積極的に変えていくこと」、これがスピリチュアルな成長である。断薬を行動面の変化とするなら、スピリチュアルな成長はまさに「**霊 (spirit)**」面の変化である。

「回復」は可能であり、それには、断薬とスピリチュアルな成長が必要である。だが、この「回復」には終わりが無いというのが、ベーシックテキストの4つ目の重要な教えである。

どんなに長い間(薬物を使用せずに)クリーンでいたとしても、完全に回復することはありえない。かなりの期間クリーンでいられたメンバーの敵は自己満足からくる安心感だ。その感覚に長いこと浸っていると、回復の進行は止まる。

(Narcotics Anonymous 2006 : 134)

### 3 Bさんの断薬史：インタビューに見るスリップの変化

Bさんは60歳代の男性で、覚せい剤依存だった。30歳代から使用をはじめ、40歳代にはかなりの量の覚せい剤を毎日使用するようになった。50歳代になって逮捕され刑務所に5年あまり収監された。出所後すぐにダルクにつながって回復の道を歩みだして5年以上となる。Bさんの回復について詳しくは別にまとめた(南 2013)。

本論では、Bさんの断薬とスピリチュアルな成長とをたどる。本節では、Bさんのスリップ(再使用)のタイプが変化していることを示す。覚せい剤の使用欲求との向き合い方を学ぶなかで、Bさんのスリップは変化していった。このような断薬史はインタビュー法によって引き出す

表1 Bさんの「回復」歴：出所後満5年まで

年月	出来事	関連する出来事など
0年1月	出所	---
0年2月	ダルク通所開始	---
0年7月	刑期満了	---
0年8月	スリップ1-1	2か月後に告白
0年11月	スリップ1-2	1週間後に告白
1年2月	スリップ2-1	女性と
1年7月	スリップ2-2	女性と
2年6月	スリップ3-1	1週間後に告白 直後に携帯電話解約
3年6月	スリップ3-5	---
4年5月	①インタビュー	パネル1回目
4年6月	クリーン1年バースデイ	---
5年1月	⑥インタビュー	パネル6回目

ことができた。

Bさんは、われわれとのインタビューの初回に、それまでのスリップ経験を大きく三つのまとまりに分けて話してくれた（南 2013：82-85）。ただし注意すべきは、覚せい剤の使用（注射による体内への摂取）の1回を「一回」としているわけではないということだ。複数回の使用のまとまりごとに語られている。<sup>6)</sup>

Bさんの「回復」の歩みを表1に示した。クリーンなどの期間がわかりやすいように、出所してダルクに通所し始めた年を「0年」とした。（また、実際には1か月半のずれがあるが、たとえば、3年11月に起こったことまでの期間は、ダルク通所歴「3年11か月」としている。）最初のスリップは、仮釈放後の保護観察期間である6か月が経過してすぐだった。同じく依存からの回復を目指していた仲間に誘われてのことだった。その3か月後にも、知人に「いっしょにやろう」と誘われて使っている。表1ではまとまりごとに「スリップ1」から「スリップ3」とした。まとまり内の回数として、「スリップ1-1」などと示した。<sup>7)</sup>

表2 Bさんの三回のスリップの時期と状況、表1との対応

	時期	状況	表1のスリップ
一回目	保護観察期間終了後すぐ	知人に誘われて	S1-1, S1-2
二回目	出所1年後	女性と S2-1, S2-2	
三回目	出所2年半後	目の前に注射器	S3-1 から S3-5

「今度」の覚せい剤使用（スリップ2）は、女性に誘われてのことだった。逮捕前の大量使用時にも、Bさんの覚せい剤使用は「セックスドラッグ」という性質が強いものだったが、このときも女性といっしょに覚せい剤を使用した。

その「つぎ」の使用（スリップ3）は、「昔の仲間」が押しかけてきてのことだった。Bさんの居所に何人かでやってきて覚せい剤を回し打ちする。それに加わったり、自制したりしながら結果として使用したことが5回ほどあったが、最後にはその仲間が逮捕されて終わった。

表2には、Bさんのスリップの時期と状況を示した。これまで述べてきたように、三回のスリップは、時期も使用状況も異なっている。スリップのたびに「いけね、失敗した」（南 2013：86）と感じているBさんだが、同じタイプの「失敗」を繰り返さないようになってきている。

一回目はただいっしょに使おうと誘われただけだった。二回目は女性からの、いっしょに使用してセックスしようとの誘いに応じた。これらのときは、Bさん自身が覚せい剤の入手を行った。その一方三回目は、覚せい剤入りの注射器が目の前に置かれた。つまり、直面した欲求（あるいは、使用の衝動）はスリップのたびごとにどんどん大きくなっている。

これは、Bさん本人もそう考えているように、スリップ1と同じタイプの再使用をスリップ1-2のあとは避けることができるようになっていくということだ。スリップ2についても同じことが言える。つまり、実際に生じたスリップが、しだいに回避困難なものになっているという結果は、回避しやすいものは回避できるようになっているという変化を反映したものなのだ。刑務所生活の辛さを思い出したり、押しかけてくる知人との連絡を絶つために携帯電話を解約したりといったBさんの努力の成果である。

いまでは出所後7年を経過しているBさんは、薬物を使わないクリー

ン状態が安定して続いている。断薬が達成されたといえる。そして、この変化はインタビューという方法によってアプローチすることができた。再使用状況の変化も、再使用が起こっていないことも、インタビューを元に描き出すことができている。

#### 4 日記という調査法

3節において、Bさんのスリップ歴をインタビューデータに基づいて再構成した。過去4年以上にわたる出来事を「想起」して語ることになるだけに、「記憶は嘘をつく」(Kotre 1995=1997)ことからすると驚きである。しかしその一方、BさんがダルクとNAのミーティングに定期的に出席し続けていることを考えるとそれは当然とも思える。というのは、ダルクとNAのミーティングにおいては、薬物使用と薬物への欲求を語ることが最大の目的だからだ。表1に見られるように、スリップしたことをいつミーティングで「告白」したかは日記に記されていた。スリップのエピソードは、ミーティングなどで何度も繰り返し語られて、Bさんの回復ストーリーの一部になっているのだと思われる。だからこそ、われわれ調査チームとの最初のインタビューにおいて、三回のスリップが一気に語られることになったのであろう。

人間行動や社会現象に関するデータは、だれかの「観察」によって生みだされるものだ(麻生 2009)。このとき、調査対象者自身による自己観察と、被観察者本人以外による他者観察とを分けることができる。

社会調査の多くの場合、自己観察がデータソースとなっている。質問紙サーヴェイにおいては、調査回答者による観察が回答の源となる。調査員によるインタビューの場合は、調査回答者による観察を調査員が聞き取って調査票に記入する一方、多くの自記式(いわゆる「アンケート」)調査では、回答者自身がこれを調査票に記入する点が異なるだけだ。(もちろん、だからといって、調査記録・データの品質に違いがないというつもりはない。とくに、記述は大きな問題であり、この点については、Sacks 1963=2013を参照せよ。)

他者観察としては、参与観察に基づくエスノグラフィ法や子どもの遊び調査などが代表的である(南 2014)。調査対象のフィールドや対象児を調査者が観察してデータとする。われわれダルク研究会による「回

復」のエスノグラフィ調査においても、ダルクミーティングの観察や、ダルクメンバーとのインタビューについてのフィールドノートが生みだされて基本データとなった（ダルク研究会 2013）。

ダルクの人びととのインタビューはまた、ICレコーダで録音し、文字起こしがなされた。このインタビュー起こしという記録だが、これも自己観察がデータ源となっている。調査対象者がインタビューにおいて発することばは、調査者からの「引き出し」（elicitation）という働きかけ（Cicourel 1988）を契機としているものの、オリジナル経験を観察したのは本人であり、その想起と言語化は本人が行っている。日記という記録も、実は、このような本人による言語化の産物である。ただし、調査者からの働きかけがなく本人が自発的に言語化し、記録をしているという点で特異なものである。

社会調査への日記利用を紹介する教科書において、Alaszewski（2006=2011）は日記を定義づける特徴として以下の4つを挙げている。

**定期性（regularity）** 日記をつけることは、日付の入った記事（entries）を定期的に作成することである。その一連の記事の連なったものが日記である。記事は、毎日のように固定した時間間隔で書かれるか、あるいは特定の出来事に結びついている。

**個人性（personal）** 記事は特定個人によって作成される。その人が日記を書いているあいだアクセスは制限される。ただし他者に日記へのアクセスを作者が許可する場合もある。また、日記が破棄されないままであることは、誰かに日記が読まれることを暗黙に認めている可能性がある。

**同時代性（contemporaneous）** 記事は、出来事や活動の発生直後か、それにきわめて近い時点で作成されるため、回想に起因する問題で記録が歪められることは最小限にとどまる。

**記録物（A record）** 記事は、ある人物が、重要であり関連があると考えていることを記録しており、出来事や行動、相互作用、感想、感情を含んでいる。通常、記録は時間に沿って書かれた文書の形をとるが、技術的發展とともに音声記録やビデオ記録の形を取ることも可能になっている。

（Alaszewski 2006=2011：3-4）

パネル調査デザインのインタビュー法による音声記録（とその文字起こし）と日記とを比較すると、「周期性」を持つ「記録物」であるという点は共通している。だが、「同時代性」には大きな差がある。いずれも「同時代」に記録されていると言うことはできるが、1か月から2か月間隔のインタビューにおいては、出来事が起こってから記録されるまでに最大で2か月の時間があくことになる。日記は基本的に毎日記録されるものであり、Bさんの場合は最長で1週間記録されない期間があったものの、これと比較すると「同時代」とは言えないほどの隔たりである。<sup>8)</sup>

## 5 日記に見られるスピリチュアルな成長のエピソード

3節において、スリップ歴という断薬史のひとつはインタビュー法によってアプローチ可能であるということを確認した。それでは、回復のもうひとつの柱であるスピリチュアルな成長についてはどうだろうか。

結論から述べると、不可能ということである。Bさんとの10回以上にわたるインタビューにおいて、回復の歩みをプロセスとして語ってもらおうと試みたことが何度かある。そのうちの1回では、「4年ぐらいまでもうなにがなんだかわからなかった」と抜粋1のように答えてくれた。

### 【抜粋1 「4年ぐらいまでもうなにがなんだかわからなかった」[5年9月<sup>⑩</sup>]]<sup>9)</sup>

南： あ、ダルクに通い始めてから、こう回復っていうものを始めて、その回復がこう、なんでしょう。まあいま、大きく分けて三回スリップがあったっていう話なんですけれども。

B： それはですね。その、スリップしてるときは、自分でもなんだかわからないんですよ。だから、ダルクに通って、NAに通いながら、4年ぐらいまでもうなにがなんだかわからなかったんですよ。

三回のスリップについて整然と語ってくれたのだから、スピリチュアルなエピソードという側面についてもBさんは明瞭な理解を持っている

のではないかと思われたのだが、どうもそうでもないようだった。

本節において、Bさんの日記を元に、そのスピリチュアルな成長を示すと考えられるエピソードを検討していく。スピリチュアルな成長といっても、それがどのようなものかについて統一見解はない。<sup>10)</sup>ここでは、組織としてのNAとNAミーティングに関連する言動に着目する。NAは1節で述べたように「回復」について大きく4つの教えを持ち、それを実践する場としてミーティングを開いている。こういったことについて、Bさんの日記の記載には変化が見られた。

#### 5-1 NA セクレタリーを引き受ける

NAは薬物依存者の自助組織であり、その組織運営は薬物依存者自身が担っている。セクレタリーというのは大事な役職のひとつである。Bさんは3年11か月の時点で、あるNAグループのセクレタリーを引き受けることにした(抜粋2)。

#### 【抜粋2 NA セクレタリーに就任 [3年11月の日記]】

月曜日〇〇で行われるNAのセクレタリーをやることになってしまった。

□□(刑務所)から帰ってそろそろ4年になる。この間薬物依存症からの脱却にずっと費やしてきた。たしかにダルクやNAは、依存症にとって効果がある。NAの本ははじめのうちは、なにがかかれてあるのかさっぱりわからなかったが、通いつづけ1年半ぐらいたった頃だろうか書かれている内容が、理解できるようになり、薬物を止め続けるには、12のステップはたいせつなのだとわかった。あらためて書くことはしないが、まだステップを理解できない人たちにわかりやすく教えて行きたいと思う。

たいへんだけど週に一回なら、できないこともない。(略)

NAのセクレタリーの仕事は、毎週ミーティングがきちんと開かれるように準備と運営をすることだ。会場を予約して、使用料を献金から支払う。鍵を借りて会場を開けて、終わると片付けて鍵をかけるといったことだ。毎週のことだけに「たいへん」なことである。もちろん、無償奉仕である。

セクレタリーを引き受けるということは、NAミーティングの意義を感じているからにはほかならない。「薬物を止め続けるには、12のステップはたいせつなのだとわかった」とあり、「まだステップを理解できない人たちにわかりやすく教えて行きたいと思う」とも書いている。「12のステップ」というのはNAの教えの中核であり、その解説がベーシックテキストの中心的内容となっているものだ。<sup>11)</sup> これの「たいせつ」さがわかったということは、まさにスピリチュアルな成長であろう。

### 5-2 NAミーティングへの否定的な姿勢

それでは、スピリチュアルな成長をする以前の姿はどのようなものだったのだろうか。たとえばBさんの場合、抜粋3のように、NAミーティングにたいする否定的な記述が見られる。

#### 【抜粋3 なまけものの勘違い [0年10月の日記]】

昨夜〇〇のNAに入った。時間を持てあましていたので30分も前に会場に着いてしまった。じっくり皆の話を聞くとやはり、どこか狂っていて真剣に話すことは、異常としか思えない。俺が一番おかしいのは言うまでもないが、なまけものがまかり通る。彼等はそれをわかち合っていると勘違いをしている。

NAミーティングの参加者を「なまけもの」と呼び、ミーティングを「わかち合っていると勘違い」というのは痛烈な批判である。ミーティングの意義を認めているならば決して書けないようなことばだろう。

### 5-3 NAミーティングでの積極的な姿勢

抜粋3に見たように、出所後10か月の時点では、NAミーティングに批判的なまなざしを向けていたBさんだが、その後変化が見られる。抜粋4では、かなり積極的にNAミーティングに取り組んでいる様子がかがえる。

#### 【抜粋4 ミーティングの本来の目的 [1年10月の日記]】

「わたしは薬物を使い、こういうふうにして薬物から遠ざかりました」と本来の目的を言うひとはまったく皆無だ。

私は少なくともそういう話をし、悩み苦しむ人にメッセージを伝えようとしている。

残念ながらそういう人は少ない。

NA ミーティングの「本来の目的」は、「わたしは薬物を使い、こういうふうにして薬物から遠ざかりました」といった話をする事だという B さんの理解が示されている。抜粋 3 の 10 か月の時点で「本来の目的」をどのように捉えていたかは明示されていないが、これとはかなり異なるものだったのであろう。「本来の目的」といったものがあるということすら考えていなかったかもしれない。

抜粋 4 における NA ミーティングの他の出席者にたいする B さんの視線は、抜粋 3 のときと相変わらずきびしいものだが、B さん自身はそういう人たちとは違うとある。「私は少なくともそういう話をし、悩み苦しむ人にメッセージを伝えようとしている」と、ミーティングの意義を認めて、それを果たすべくふるまっているという自負が述べられている。抜粋 3 が書かれた 10 か月の時点から抜粋 4 の 1 年 10 か月の時点のあいだに、ミーティングに取り組む姿勢に変化があった。これこそ、スピリチュアルな成長のひとつであろう。

#### 5-4 ターニングポイント 1: 「思いっきり話せた」

B さんの日記の記載から、NA ミーティングに取り組む姿勢の変化を見だし、スピリチュアルな成長が日記から跡づけられる例として示した。最後に、変化のターニングポイントと考えられるエピソードのひとつを日記から示しておこう。NA ミーティングで「思いっきり話せた」という記載である (抜粋 5)。

#### 【抜粋 5 「NA で思いっきり話せた」 [1 年 1 月の日記]】

〇〇の NA (ミーティング) で思いっきり話せた。それでもまだ話し足りない気がしたが、あれ以上では他人に迷惑になる。あんなに話したのは俺としては珍しい。本当はもっと話し好きで本心はもっと話したいと思っているのかもしれない。人間言葉がしゃべれるからにはいつも誰かと会話がしたいのかもしれない。

NA ミーティングで「思いつき話せた」というだけで、スピリチュアルな成長を直接想起させるようなものはない。だが、そのことに満足感と手応えを感じていると読み取れる。それまでは、「思いつき」話すことができなかった。それができた。できると「まだ話し足りない気」がする。「もっと話したいと思っているのかもしれない」と自分自身のことを見直している。「思いつき話」すということが出来る、そして、NA ミーティングはそれが出来る場であることをこのような機会を契機として感じるようになっていく。前項までで示したスピリチュアルな成長のターニングポイントとして位置づけることができるエピソードだ。

#### 5-5 正確に再現しがたいもの：ちょっとした出来事と日付

抜粋5のような、NAのミーティングにおいて「思いつき話」し、それに感動し日記に記載したということは、いまではBさんはすぐには思い出せないことだろう。このような小さな出来事も記録されているというのが日記の利点のひとつである。ミーティング参加者を「なまけもの」と感じたこと（抜粋3）も、ミーティングの「本来の目的」を言うひとが少なく考えたこと（抜粋4）もそのような、記憶に残らないエピソードであろう。

スピリチュアルな成長が右肩上がりの一直線のものではなく、抜粋5にあるような小さな気づきの積み重ねだとするなら、Alaszewskiのいう「周期性」と「同時代性」という特徴を、短い間隔で実現している日記は、まさにスピリチュアルな成長を探求するための貴重な資源である。

さらに重要なのは、「記録物」であり記録された時点である日付が刻印されているということだ。ひとの記憶は、エピソードの記憶には強い。だが、「ほとんどの人間は人間カレンダーではない」と言われるように、エピソードの前後関係を想起・再現するのは苦手である（Kotre 1995=1997:122）。つまり、こんなことがあった、あんなことがあった、というのは覚えている。だが、それがいつだったか。相前後して起こった2つの出来事のどちらが先だったかといったことは覚えていられないものなのだ。

日記にはもちろん、記載した日付が入っている。そこで報告されている出来事が生じた時点はその日の少し前ということになる。「考えた」

ことや「感じた」ことは、当該日付の日に生じたと思われる、日記を書いているときのものである。

「成長」は「変化」であり、それを描くには、「変化前」と「変化後」の状態、そして、それらの前後関係を示す必要がある。抜粋3と抜粋4の記載は、出来事の内容だけではなく、それらが10か月と1年10か月のものであるということが重要なのだ。抜粋5は、2つの時点のあいだにあたる1年1か月の出来事を報告しているからターニングポイントとしての位置づけが可能となる。

## 6 薬物依存からの「回復」調査における日記法の可能性

3節では、Bさんの断薬史をインタビューデータに基づいて再構成した。「三回」のスリップは次第に回避困難なものとなっていた。その後、回避しやすい欲求場面においては覚せい剤を使わないでいられるようになったという変化を見いだすことができた。

5節においては、NAとインタビューにたいするBさんの取り組みの変化を確認した。NAのミーティングを否定的に捉えていた10か月時点と、積極的にミーティングに取り組んでいた1年10か月との対照を日記から読み取った。スピリチュアルな成長の一例と捉えることができた。

結びとなる本節では、Bさんの「回復」において最重要なエピソードのひとつと思われるものを紹介する。あるNAミーティング会場に到着して着席したとたん、その直前まで感じていた覚せい剤への強い渴望が消失したという出来事である（抜粋6）。

### 【抜粋6 強い渴望の消失 [2年2月の日記]】

《略》完全にやりたいモードが無くなっているのだ。奴と話をしたせいかな？ それともNAという存在がそうさせたのか？ でもたしかに違う気分である。おかしい？ なぜ？ 不思議？ NAの信奉者なら「これがハイヤーパワーだ」なんて思うことだろう。やりたいモードが無くなったのは本当のことだ。ふーむ！？ NAねえ？ 効果があるのかもしれない。認めざるを得ない。「自分の敗北を認める！」なんて言ってるしね。解りましたよ！ 「イスに座った途

端に消え失せたのだー」。消えたことは私にとって、まことに有難いことなんだ。でもこれはNAのパワーじゃあねえ。まだ信じんぞ！ これは私の力だ。私の考えだ！ fuck you! NA。

だがしかしButだ。内心ではNAの存在を認めてるんだ。色々不思議なことが起こるし、仕方ねえだろう。

2年2月のある日の日記の記載の前半では、ミーティング会場で着席したとたんに渴望が消失した経緯が記されている。抜粋6はそれに続く部分である。強い渴望の消失を「NAという存在がそうさせたのか？」と自問し、それを認めるような記述が続く。だがその後「でもこれはNAのパワーじゃあねえ。まだ信じんぞ！ これは私の力だ。私の考えだ！ fuck you! NA。」と一度は否定する。そのうえで、最後には「内心ではNAの存在を認めてる」と締めくくられる。

これは、強い渴望の消失という断薬に成功した例であるが、Bさんの「回復」ストーリーにとって重大な意味を持つものとなっている。インタビューやミーティングにおいて繰り返し語られてきた。抜粋5の「思いつき話せた」というエピソードが忘れ去られていると思われるのは対照的に、こちらの渴望消失エピソードはBさん本人の記憶においてもしっかりとターニングポイントとして刻み込まれている。<sup>12)</sup>

インタビュー法と日記という、方法と資料の対比で断薬とスピリチュアルな成長へのアプローチを論じてきたが、実は自伝的記憶システムにおいてあるまとまりとなっているかどうか、想起・再現の容易さを大きく規定すると考えられる。ミーティングなどで繰り返し語ることで、エピソードの断片がまとまりとなって断薬史やスピリチュアルな成長誌、「回復」ストーリーを形作る。<sup>13)</sup> それがうまくできているならば、インタビューにおいてもすらすらと語るができる。そうでなければ、日記があれば再構成可能だが、日記がないとアプローチ困難となってしまう。

その一方で、Bさんの場合には、たまたま断薬史を自身でうまく形成できていたが、スピリチュアルな成長誌のほうはできていなかったただけだ、ということも考えられる。日記がなくとも、スピリチュアルな成長誌を確立し、インタビューにおいて語るということが出来るひとがいるのかもしれない。<sup>14)</sup>

この点は今後の課題としたい。スピリチュアルな成長というものがどのようなものであり、「回復」とどんな関係にあるのか。本論では、日記資料が効果的だった事例を示したが、インタビュー法においてこれにアプローチできないというわけではないだろう。その可能性の追求も含めて、さらに「回復」の探求を続けていくことにしたい。

\* 本論文は、科学研究費補助金基盤研究（C）25380698「薬物依存者の『社会復帰』に関するミクロ社会学的研究」（代表：南 保輔）の研究成果の一部である。調査に協力していただいたダルクのみなさんに大いなる感謝を表したい。本論3節は第85回日本社会学会大会報告「スリップサイクルの進化を通じての『回復』：ダルクにおける『回復』の社会学的検討（5）」（2012年11月4日札幌学院大学）に、そのほかの部分は、第86回日本社会学会大会報告「薬物依存者における『回復』調査の困難と日記：ダルクにおける『回復』の社会学的検討Ⅱ（4）」（2013年10月12日慶應義塾大学）に加筆修正したものである。発表や草稿にたいしてコメントを寄せてくださったみなさんに感謝する。

#### 注

- 1) ダルクメンバーが一日に3回行うミーティングのうち午前と午後の2回はダルクで行われ、夜は地域のNAに出かけていってそのミーティングに参加することが多い。
- 2) ダルクのスタッフ3人にこのテキストについて聞いたところ、キリスト教徒にとっての聖書のようなものと2人が回答した。そのうちのひとり、アメリカのNAメンバーの家に行くと、このテキストがトイレに置かれていることが多いとも言っていた。日本のダルク入寮中のメンバーでこのテキストを個人的に所有しているひとは少ないが、退寮してNAのミーティングに出続けるようなひとはその時点で持つことになるものだと教えられた。
- 3) NAやダルクでは、「アディクション（addiction）」と「アディクト（addict）」という言葉が使われている。厳密に訳せば「嗜癖」であり、「依存」は「dependence」が対応している。
- 4) スピリチュアルな成長というとき、「神（God）」の概念が関係してくる。NAの元となったAA（Alcoholics Anonymous）の宗教性は大きな論点であり、本論で取り上げることはできない。日本語でまとめたものとして葛西の議論がある（2007）。

- 5) 引用や断片中の二重パーレン (〇) は、引用者南による注であることを示す。
- 6) 南がまとめたBさんの「語り」(南 2013) などにおいては、この初回インタビューにおいてBさんが「三回」スリップしたと明示的に語ったとされている。だが、今回インタビュー記録を見直したところ「三回」という表現は使われてはいなかった。
- 7) 表1は、インタビュー結果と日記の両方に基づいて作成されている。たとえば、表1の「0年11月」の「スリップ1-2」については、初回インタビューでは言及されなかった。
- 8) 本論初校時に、STAP細胞の論文問題についての理化学研究所の小保方晴子研究ユニットリーダーの記者会見があった。一連のやりとりに見られたように、「実験ノート」はまさに実験を進めながら「同時に」記録するものである。記録対象の生起時点と記録時点との間隔は日記よりもさらに短いものであり、たとえばスポーツの実況中継に近いと考えるべきものだろう。

Francis & Hesterが「公共の場面での活動」のデータを作り出すために作成した「実況報告 (running commentary)」は、実況中継と同じく、対象とする活動の生起時点と記録時点とがほぼ同時というものである。そのやり方は以下のように述べられている：

著者のひとりが小さなテープレコーダを使い、マイクをクリップでシャツにとめて、公共の場面での相互行為を含む日常的な活動をしながらそれを実況し、録音した。(略) 実況報告は、通りを歩いているときとスーパーで買物をしているとき、そこで観察したことと経験したことを詳細に記述するようにおこなわれた。

(Francis & Hester 2004=2014 : 131)

- 9) 本論では、インタビュートランスクリプトと日記の一部を、参照の便をはかるために「抜粋」として番号をつけて提示する。インタビューと日記の年月は表1に合わせている。インタビューの年月後の丸数字はパネル調査の何回目かを示す。抜粋中の二重パーレン (〇) は、引用者南による注記を示す。地名などを伏せ字にしているが、たとえば「〇〇」が指すものは抜粋ごとに異なる。
- 10) これは、ダルクのスタッフや利用者にインタビューしての印象である。以下の議論に見られるように、その具体的な特定につなげたいというのが本論のねらいである。

Bさんは、4年8か月時のわれわれとのインタビューにおいて、自身の生き方を「シンプル」なものと表現している。覚せい剤を使っていたころの生き方について、「死に急ぐような」ものだったと言っている(南

2013：103)。このような生き方の変化こそスピリチュアルな成長がもたらしたものと言えるだろう。

- 11) NAの12ステップは以下のとおりである。
  - 1 私たちは、アディクションに対して無力であり、生きていくことがどうにもならなくなったことを認めた。
  - 2 私たちは、自分より偉大な力が、私たちを正気に戻してくれると信じるようになった。
  - 3 私たちは、私たちの意志といのちを、自分で理解している神の配慮にゆだねる決心をした。
  - 4 私たちは、徹底して、恐れることなく、自分自身のモラルの棚卸表を作った。
  - 5 私たちは、神に対し、自分自身に対し、もうひとりの人間に対し、自分の誤りの正確な本質を認めた。
  - 6 私たちは、これらの性格上の欠点をすべて取り除くことを、神にゆだねる心の準備が完全にできた。
  - 7 私たちは、自分の短所を取り除いて下さい、と謙虚に神に求めた。
  - 8 私たちは、私たちが傷つけたすべての人のリストを作り、そのすべての人たちに埋め合わせをする気持ちになった。
  - 9 私たちは、その人たち、または他の人々を傷つけないかぎり、機会あるたびに直接埋め合わせをした。
  - 10 私たちは、自分の生き方の棚卸を実行し続け、誤ったときは直ちに認めた。
  - 11 私たちは、自分で理解している神との意識的ふれあいを深めるために、私たちに向けられた神の意志を知り、それだけを行っていく力を、祈りと黙想によって求めた。
  - 12 これらのステップを経た結果、スピリチュアルに目覚め、この話をアディクトに伝え、また自分のあらゆることにこの原理を実践するように努力した。

(Narcotics Anonymous 2006：26-27)

- 12) Kotre (1995=1997：149)によると、心理学者のDan McAdamsは「自己を定義づける記憶のことを中核的エピソードと表現している」という。
- 13) 断薬、スピリチュアルな成長、「回復」と、「史 (history)」、「誌 (biography)」、「ストーリー (story)」と相関連することばとを結びつけた。これらは、本来きちんと定義して使い分けるべきものだが、ここでその用意がない。
- 14) Bさんがわれわれとの1回目のインタビューでスリップ歴をすらすらと語ることができたのは、自伝的記憶のなかにまとまった断薬史ができていたからと推定される。ひょっとすると、この直前にBさんが日記を読み返

して、記憶を新たにしたいという可能性もありうる。Bさんに確認したところ、そんなことはなかったということだったが、もしそうだとするならば、自身の振り返りを助けるという日記のはたらきがここに見られるだろう。また、日記を書く行為そのものも、本人に直接資する面があった。Bさんは振り返ってみると、「日記に逃げて」いたという（インタビュー⑮、6年9月）。「逃げる」という否定的な表現をしているが、その日の出来事を振り返って日記をつけるという行為は、時間をついやし退屈や寂しさを紛らわせるはたらきをすると同時に、内省する機会を提供するという点でスピリチュアルな成長を促進したという面もあったと考えられる。実際に、本論文の草稿を読んだダルクスタッフは、Bさんの日記はステップ10の「棚卸」にあたるものだと指摘をされた。

## 引用文献

- Alaszewski, Andy. 2006. *Using diaries for social research*. Sage. =2011. 『日記とはなにか：質的研究への応用』川浦康至；田中 敦訳. 誠信書房.
- 麻生 武. 2009. 『「見る」と「書く」との出会い：フィールド観察学入門』新曜社.
- Cicourel, Aaron V. 1988. Elicitation as a problem of discourse. In Ammon, U. et al. eds. *Sociolinguistics*. Gruyter. 903-910.
- ダルク研究会. 2013. 『ダルクの日々：薬物依存者たちの生活と人生』知玄舎.
- Francis, David, & Hester, Stephen. 2004. *An invitation to ethnomethodology: Language, society and interaction*. Sage. =2014. 『エスノメソドロジーへの招待：言語・社会・相互行為』中河伸俊；岡田光弘；是永 論；小宮友根訳. ナカニシヤ出版.
- 平井秀幸. 2013a. 「承認」と「保障」の共同体をめざして：草創期ダルクにおける「回復」と「支援」. 『四天王寺大学紀要』56：95-120.
- 平井秀幸. 2013b. まえがき. ダルク研究会『ダルクの日々：薬物依存者たちの生活と人生』知玄舎. 2-7.
- 葛西賢太. 2007. AAの成立と宗教性をめぐる葛藤. 葛西『断酒が作り出す共同性：アルコール依存からの回復を信じる人々』世界思想社. 45-84.
- Kotre, John. 1995. *White gloves: How we create ourselves through memory*. Free Press. =1997. 『記憶は嘘をつく』石山鈴子訳. 講談社.
- 南 保輔. 2012. 居場所づくりと携帯電話：薬物依存からの「回復」経験の諸相. 『成城文藝』221：158-135.
- 南 保輔. 2013. 薬池肉林の日々から徒然クリーンへ：Bさん. ダルク研究会『ダルクの日々：薬物依存者たちの生活と人生』知玄舎. 78-111.
- 南 保輔. 2014. 観察. 『社会調査事典』丸善出版. 76-77.
- Narcotics Anonymous. 2006. 『ナルコティクスアノニマス』（第5版日本語翻訳版）

- Narcotics Anonymous World Services,
- Sacks, Harvey. 1963. Sociological description, *Berkeley Journal of Sociology* 8 : 1-16. =2013. 社会学的記述. 南 保輔 ; 海老田大五朗訳. 『コミュニケーション紀要』 24 : 81-92.
- 相良 翔. 2013. ダルクにおける薬物依存からの回復に関する社会学的考察 : 「今日一日」に焦点をおいて. 『福祉社会学研究』 10 : 148-170.

**Advantages of Supplementing Interview Data  
with Diary Information:  
Evaluating the Benefits of Spiritual Growth in Recovering Drug Addicts**

Yasusuke MINAMI (Seijo University)  
yminami@seijo.ac.jp

**ABSTRACT**

Narcotics Anonymous (NA) is one of the major self-help organizations for drug addicts. Its basic tenet states that recovery from drug addiction requires spiritual growth, in addition to abstinence from drug use. The history of how one former addict stopped using drugs was determined through with panel research interviews. His spiritual growth biography (*i.e.*, the record of his spiritual growth) was obtained thanks to his detailed diary.

This addict has become an active participant in NA meetings, which can be interpreted as a sign of his spiritual growth. Small events, such as feeling content after having good meeting participation and accepting a secretary position for an NA group, were recorded together with the dates in his diary, which enabled reconstruction of the biography of his spiritual growth.

KEY WORDS : drug addiction, recovery, diary method, panel research interview,  
DARC, Narcotics Anonymous (NA)